

令和4年サワラ春漁の漁況予報

令和4年4月1日

香川県水産試験場

サワラ幼魚の資源量は、発生年によって変動が大きく、その多寡が翌年以降の漁獲量を左右します。そこで、0歳魚資源尾数を用いて、令和4年のさわら流しさし網の春漁期における各年齢魚の漁獲状況を推定し、漁況予測を行いました。

1. 0歳魚資源尾数の推定

0歳魚資源尾数は、国立研究開発法人水産研究・教育機構が、毎年度、サワラ瀬戸内海系群の資源評価を行って公表しており、令和2年発生群まで示されています。

一方、香川県水産試験場においても、県内海域で8月に収集した0歳魚の平均サイズや、播磨灘の大型定置網によるキノゴ銘柄の漁獲量等から、令和3年発生群までの0歳魚資源尾数を推定しています。

漁況予測には資源評価による推定値を用いました。ただし、令和2年発生群については誤差が大きいとされているので、これと香川県水産試験場による推定値の平均としました。また、令和3年発生群は香川県水産試験場による推定値を用いました。

なお、水産研究・教育機構による令和3年度の資源評価において、年齢別漁獲尾数の算出方法を変更したため、これまで資源評価に使用していた過去からの0歳魚資源尾数の数値が大幅に増加しました。

2. 令和4年春漁の漁況予測

0歳魚資源尾数の推移と春漁における漁獲の関係を次ページの図に示します。

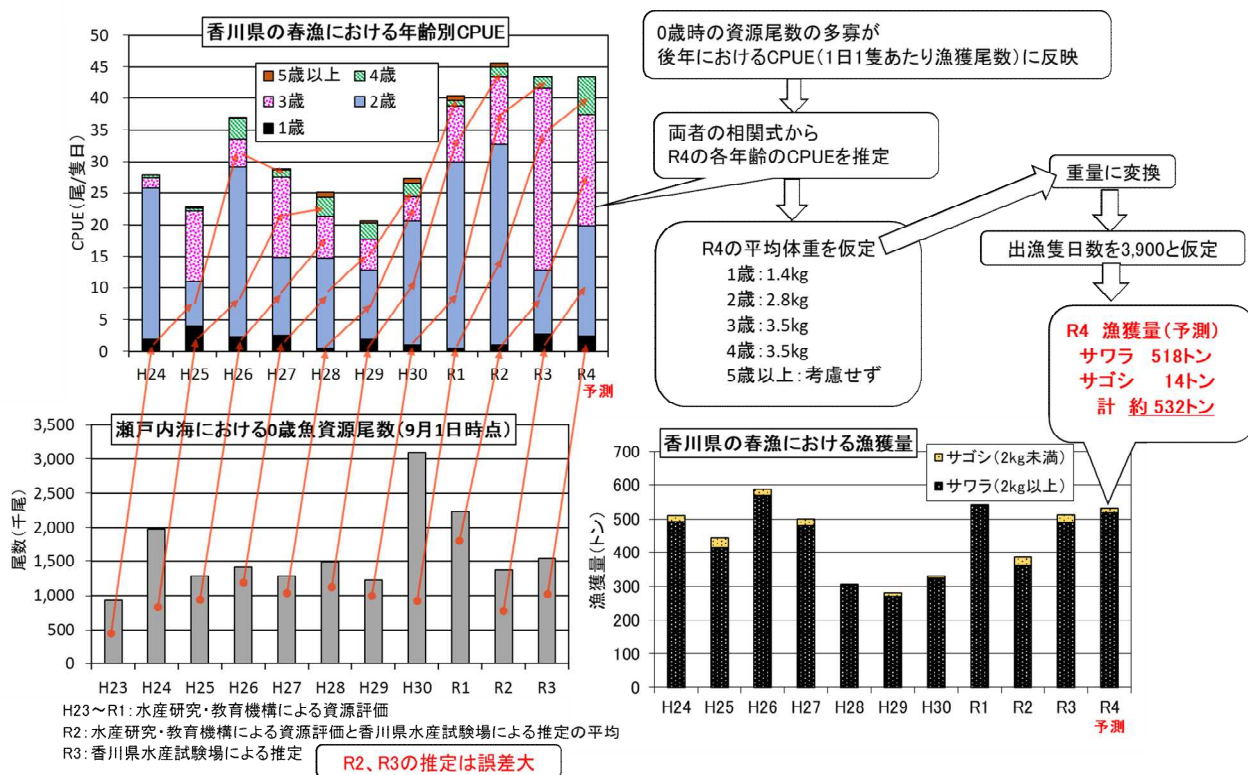
このうち、左下の図は、瀬戸内海における0歳魚資源尾数ですが、年によって変動が大きいことがわかります。左上の図は、香川県の春漁における漁獲尾数の年齢構成の推定結果ですが、2歳魚および3歳魚を主体として、組成は年によって異なっています。

0歳魚が多ければ、その2年後に2歳魚、3年後に3歳魚、4年後に4歳魚が多めに漁獲され、少なければその逆になるような相関関係があります（赤い矢印で年齢の移行を示しています）。この関係を使って、令和4年の漁獲尾数における年齢構成を計算したところ、2歳魚は前年より多く、3歳魚は少なくなるという結果になりました。

操業隻日数が前年と同程度であると仮定し、重量に変換すると、右下の図に示すように、令和4年の漁獲量は約532トンと推定されました。

以上のことから、令和4年の春漁においては、例年どおり2歳魚、3歳魚が主体となるほか、前年によく漁獲された3歳魚が4歳魚となって例年よりも多く漁獲されると考えられます。漁獲される合計尾数は前年と同程度であり、漁獲サイズは1歳魚、2歳魚は前年と同程度、3歳魚、4歳魚は前年より小さくなると見込まれ、漁獲量は前年と同程度になると推定されます。

なお、令和2年および3年発生群の資源尾数は、かなりの推定誤差を含んでいます。また、海域による漁獲の偏りが大きい場合や出漁隻日数が大幅に異なった場合は、予測と異なる漁獲量になることがあります。



令和3年度サワラ瀬戸内海系群の資源評価では、水準は中位、動向は増加とされています。また、管理方策の提言において、高齢魚が少ないため、2、3年加入が少ない年が続くと、資源量が減少する可能性が高い状況にあることから、若齢魚を獲り残し、高齢魚の割合を上昇させる方向性が望ましいと述べられています。少なくとも現状の資源管理の取組みを緩めることなく、今後とも継続することが必要です。